

サットンのトマス『第1任意討論集』第21問題 試訳

石田 隆太

1 はじめに

本稿は、13世紀後半から14世紀前半に活躍したスコラ学者サットンのトマス（1250年頃～1315年）が個体化の原理（*principium individuationis*）について論じている『第1任意討論集』第21問題の訳出を試みる¹。サットンのトマスは、トマス・アクィナスの亡き後にアクィナスの教説をオックスフォードにおいて擁護したことで知られる初期トミストの一人である²。彼はいくつかの箇所では個体化論を展開しており、その主要な箇所の一つが『第1任意討論集』第21問題である³。

サットンのトマスによる『第1任意討論集』は全21問題からなる。この任意討論集の冒頭では次のように言われている。

[この] 任意討論では創造主たる神と被造物について問われていた。神については、神の真理に関する或ること、ペルソナの起源に関する或ること、内に対してのみならず外に対する神の能力に関する或ることが問われていた（3, 1-4）⁴。

¹ 底本は次の通り：Thomas von Sutton, *Quodlibeta*, ed. M. Schmaus (unter Mitarbeit von M. González-Haba), München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, 1969.

² 彼の生涯や著作に関する主要な先行研究は次の通り：Klima, G. “Thomas of Sutton,” in H. Lagerlund (ed.), *Encyclopedia of Medieval Philosophy: Philosophy between 500 and 1500*, Second Edition, Dordrecht: Springer, 2020, 1907-9; Schneider, J., “Einleitung,” in Thomas von Sutton, *Quaestiones ordinariae*, ed. J. Schneider, München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, 1977, 19*-279*; Roensch, F. J., *Early Thomistic School*, Dubuque, Iowa: The Priory Press, 1964, 44-51; Hinnebusch, W. A., *The Early English Friars Preachers*, Roma: Istituto Storico Domenicano, 1951, 396-410; Sharp, D. E., “Thomas of Sutton, O. P.: His Place in Scholasticism and an Account of his Psychology,” *Revue néo-scholastique de philosophie*, 41 (1934): 332-54; 42 (1934): 88-104; 43 (1934): 219-33; Pelster, F., “Thomas von Sutton O. Pr., ein Oxfordener Verteidiger der thomistischen Lehre,” *Zeitschrift für katholische Theologie*, 46 (2) (1922): 212-53; 46 (3) (1922): 361-401; F. Ehrle, F., “Thomas de Sutton, sein Leben, seine Quolibet und seine Quaestiones disputatae,” in *Festschrift Georg von Hertling zum siebenzigsten Geburtstage am 31. Aug. 1913*, Kempten: Jos. Kösel’sche Buchhandlung, 1913, 426-50.

³ 彼の個体化論に関する主要な先行研究は次の通り：Faitanin, P., “O princípio de individuação segundo Tomás de Sutton,” *Aquinas*, 15 (2011): 66-89; Klima, G. “Thomas Sutton on Individuation,” in G. Klima & A. W. Hall (eds.), *Universal Representation, and the Ontology of Individuation*, Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2011, 91-102; Pickavé, M., “The Controversy over the Principle of Individuation in *Quodlibeta*,” in Ch. Schabel (ed.), *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Fourteenth Century*, Leiden - Boston: Brill, 2007, 59-69; Hoenen, M. J. F. M., “The Thomistic Principle of Individuation in 15th-Century Thomistic and Albertist Sources,” *Medioevo*, 18 (1992): 335-37; Conti, A. D., “La composizione metafisica dell’ente finito corporeo nell’ontologia di Tommaso Sutton,” *Documenti e studi sulla tradizione filosofica medievale*, 2 (2) (1991): 334-38; Schneider, “Einleitung,” 140*-63*; Sharp, “Thomas of Sutton,” 92-98.

⁴ 以下も引用に際してはシュマウス版の頁数と行数のみを付記する。

次に、『第1任意討論集』の全21問題を概観しよう。以下は、各問題の冒頭のみを引用した一覧である。論題を見るかぎりでは、第1問題から第5問題が神について直接的に問題にしているのに対して、第6問題以降は被造物について直接的に問題にしており、第21問題もその一部をなしている。

- 第1問題：神に或る受動的能力を措定することはできるのか否か (3, 5)。
- 第2問題：理解の秩序に即しては何も前提されることなしに子性の関係が神の本質に無媒介に基礎づけられるということが前提されるなら、起源の真で完全な理拠に即した起源はわれわれにとって可能なものとしての理解の仕方に即して神のものどもにおいて保たれうるのか否かが問われる (14, 1-5)。
- 第3問題：所与のあらゆる被造物の上に神は本質的な段階においてより高位の被造物を無限に造ることができるだろうということが前提されるとして、ここでわれわれが中間のものについて語ることができるかぎりでの中間のものが脇に置かれるなら、神は今のところ所与のあらゆる被造物よりも無限に隔たっている被造物を造ることができるのか否かが問われる (26, 1-5)。
- 第4問題：絶対的な観点に立つ側からみて、神の本質はペルソナによる、子のようなペルソナの流出の形相的根拠ないし形相的原理であるのか否か (35, 1-3)。
- 第5問題：われわれが本質的な一性とペルソナ的な一性という二つの一性を区別するようにして区別される真理が神のものどもにおいて本質と関係に当てはまるのか否か (41, 1-3)。
- 第6問題：或る被造の何性が第一に存在者であること、すなわち他のものによってではなくて自らによって存在者であることは可能であるのか否か (47, 1-2)。
- 第7問題：自らの存在ではない或るものは始まりなしに存在を受容することができるのか否か (53, 1-2)。
- 第8問題：任意の種の本性には固有の決められた作用が対応するのか否か (61, 1-2)。
- 第9問題：或る能動者は現実態においてあることに即してではなく能動することができるのか否か (66, 1-2)。
- 第10問題：生成の後に複合体において存続する附帯的な態勢は、生成の途にあつては実体形相よりも質料において本性的に先行するのか否か (71, 1-3)。
- 第11問題：あらゆる能動において、能動者と能動者がそれに対して能動するところのものは担い手によって区別されるのか否か (76, 1-2)。
- 第12問題：知性的魂は質料の可能態から引き出されるのか否か (82, 1)。
- 第13問題：内在的ないし外在的な把握能力は或る内在的な原理によって可

能態から現実態へと導かれるのか否か（86, 1-3）。

第14問題：人間知性は、それから可知的なものが存在したりそれから理解が生じたりする或る事物の形象を受容するよりも前に自らの本質によって自立しているのか否か（92, 1-3）。

第15問題：知性に受容された形象は、それがあるところの知性そのものに対して作動的に能動することができるのか否か（99, 1-2）。

第16問題：認識能力の現実態には、形相的原理の現前とは別の、対象の現前が必要とされるのか否か（108, 1-2）。

第17問題：精神の言は理解の現実態そのものないし理解の現実態によって形相づけられた或るものであるのか否か（115, 1-2）。

第18問題：予定された任意の単数のものには予定の理拠ないし原因があるのか否か（124, 1-2）。

第19問題：豪気や高邁のように卓越した地位に即して人間を完成させる倫理徳は必然的に、自らの形相的本質に即して他の徳と結合しているのか否か（131, 1-4）。

第20問題：至福者の附帯的な喜びは強められたり弱められたりしうるのか否か（136, 1-2）。

第21問題：実体の個体化の原理は、あらゆる附帯性に本性的に先行する実体的固有性であるのか否か（139, 1-3）。

それでは、底本の校訂者であるシュマウスが採用している段落分けに即して、第21問題の概要を見ていくことにしよう。問題提起を行う第1段落に続く第2段落と第3段落は、サットンのトマスにとっては異論に相当する。すなわち、第2段落は個体化の原理が実体的固有性であるという立場を提示し、第3段落は第2段落で提示される三段論法の小前提（個体化の原理は附帯的固有性ではない、という内容）を証明する。それに対して第4段落は反対異論に相当し、ダマスケヌスを権威として個体化の原理が附帯的固有性であるとする立場を保持する。トマスも基本的にはこの立場の側に与することになる。

第5段落から主文が始まり、トマスの見解が提示される。彼の立場は、次元量が質料実体的実体の個体化の根本的な原理だと考えるものである。第5段落では、量に関するアリストテレス的な定義として、量とは「それらの各々が一つの本性であるところの内在するものども [すなわち諸部分] へと可分的である」（『形而上学』第5巻第13章 1020a7-8）という規定が導入されており、これが考察の重要な前提の一つとなっている。トマスによれば、同一の種において個々の質料実体を区別する個体化の原理は「同じ [種的] 本性の部分として同じ理拠のうちにある事物」という要件を満たす必要がある。そして量だけがこの要件を満たすものだと見なされる。なぜなら、量だけが他の何ものにもよらずにそれ自体で部分に分割することができるからである。さらにその理由としては、すでに量の規定には全体のなかでどのような位置を占めているかが内包されており、そうした位置の相異によって量が区別されると言われる。量以外の附帯性との違いについてトマスは、白という質のカテゴリーに属するものは基体がなければそもそも把握で

きないが、量のカテゴリーに属する線は目の前の物体などの基体のうちに内在していなくても頭のなかで思考することにより把握することが可能だと言う。

次に第6段落でトマスは、質料の実体がどのようにして量によって根本的に個体化されるのかを述べる。その基本的な過程は、第一に量が質料を個体化し、次にそのようにして個体化された特定質料が質料的形相を個体化するというものである。この過程を逆に辿るなら、まず形相はそれ自体では不可分であるためそれを受容する質料によって分割される必要がある。しかし質料もまたそれ単独では不可分であるためそれに随伴する量によって分割される必要がある。同一の種において個々の質料の実体が区別されるのは量によるという点に関する最も明白な権威として、ポエティウス（『三位一体論』第1章）が挙げられるのも重要である。

トマスは、第5段落と第6段落では自らの基本的な立場を示しているのに対して、第7段落からは想定反論を取りあげつつそれに応答することを始める。第7段落で提示される反論の立場によれば、質料の実体はそれ自体ですでに個体化される。この立場は個体化の原理が存在の原理でもあり個体化の原理でもあり区別の原理でもありと考えており、アリストテレス的な四原因（質料因、形相因、作出因、目的因）をそのまま個体化の原理だと見なす。第7段落の後半と第8段落では個体化の原理が量であるという考えに対する批判も提示され、量は思考のうえでは普遍的なものであるのだからそれは単独では個体化をもたらすものではないと言われている。

第9段落以下は第7段落と第8段落に対するトマスの応答部分である。第9段落は、論敵が個体の原因と個体化の原因（つまり個体化の原理）を区別していないことを問題視する。この区別はすでに第5段落でも強調されていたが、トマスはここで改めてこの区別を引き合いに出す。彼によれば、四原因はたしかに個体の原因ではあるが、同じ理拠のうちにある諸部分を分割するという機能はやはり量にしかないので、個体化の原因であるのは量だけである。第10段落は、質料の実体が生成されるのはまずもって実体としてであることを強調する反論に対して、実体の生成が終極する以前に、アヴェロエスの言うような未限定の諸次元が質料においては形相に先行することを指摘する。トマスによれば、未限定の諸次元が質料において先行することにより、まず物体において個々の物体が実体として生成され、次に個々の生物が実体として生成され、そして個々の動物が実体として生成されるにいたる。第11段落は、ヨハネスという人間はペトルスという人間から何よりもまず実体として区別されているとする反論に対して、実体が区別されるためには量が最初に区別される必要があることを主張する。そのことを踏まえてトマスは、次元量を個体化の第一原理と呼ぶ。第12段落は、もし量だけがそれ自体で個体化をもたらす機能を有するとしたら、量は普遍的には捉えられるものではないことになるという反論に対して、量が個体化の原理であると言われる場合の「量」は共通名によって指示されるものではないと応答する。トマスは、もしそのような反論が成り立つなら、実体も質料も形相も同様の仕方では個体化の原理ではないことになるとも指摘している。第13段落は、直接には第8段落での想定反論に対する応答部分である。数学では個体からの抽象は行われるが量から抽象されることはないのだから量には個体化は適合しないと考える想定反論に対してトマスは、抽象的な意味での量はたしかに個体化の原理ではないが、そうではなくまさに個別的なものであるかぎりでの量はやは

り個体化の原理であると主張する。ただし補足として、量が質料の実体の個体化の原理であるのは内在的な原理ではなく外在的な原理としてであると言う。そこから、ペトルスやヨハネスという個体名が直接的に表示しているのは自体的な存在者であるそれぞれの実体のことだが、そうした実体を個体化する役割を担うのは量だけだとされる。

第14段落は主文を総括する部分である。質料の実体の個体化の原理が実体的固有性であるのか否かという問題に対して、トマスはそうではないと明言する。なぜなら、すでに何度も見てきたように、附帯性の一つである量が個体化の原理だからである。

第15段落以下は、反対異論を提示していた第4段落に対する反対異論解答に相当すると言える。第7段落から第13段落は実質的には異論解答でもあったことになる。第15段落は、自存には自体的な存在者であることと共通化不可能であることという二つの要素があることを提示する。まず第16段落は、前者の要素については実体形相が自存の原理でありうるのであって、附帯性はあくまで副次的なものでしかないことを示す。次に第17段落は、後者の要素については量が自存の原理であることを確認する。そのうえでトマスは、サン・ヴィクトルのリカルドゥスが『三位一体論』第2巻（第12章）で論じているダニエル性という実体的固有性を例に挙げて、そうした固有性が存在することは否定しないがそれが個体化の原理であることは否定する。以上の反対異論解答は、反対異論に対して反論するものというよりは補足を兼ねたものであると思われる。

第18段落は、これまでにまだ出てきていない第三の立場を提示する。それは、実体を生成する作出因が個体化の原理であると主張する立場である。この第三の立場は、個体が同時に一つの種でもある（と理解されるかぎりでの）天使や天体には量について言われてきたような個体化の原理が当てはまらないことを問題視する。これに対する応答部分である第19段落によれば、量について言われるかぎりでの個体化はまずもって天使にも当てはまるようなものではない。なぜなら、天使の場合には種そのものが単独で共通化不可能であるので、その原因を求める必要がないからである。トマスはここでそう明言していないが、これまでの見立てを使うなら、天使の場合だけは個体の原因と個体化の原因が同一だと言っていいのかもしれない。他方で天体の場合には、天使の場合とは異なり質料を有しているので、やはり量が個体化の原理であることになる。

このようにサットンのトマスは一貫して、質料の実体においては量が個体化の原理であるという立場を保持する。そうした彼の議論に関する紹介も兼ねて、以下に試訳を提示することにしたい。

2 試訳

第21問題⁵

1. 実体の個体化の原理は、あらゆる附帯性に本性的に先行する実体的固有性 (*proprietas substantialis*)⁶であるのか否か。

⁵ 以下では便宜のために、シュマウスが採用している段落分けに番号を付す。

⁶ 以下では、() は原語の提示、[] は訳者による補足のために用いられる。

2. そうだと議論される。理由は次の通り。個体化の原理は実体的固有性か附帯的固有性 (*proprietas accidentalis*) である。しかるに、それは附帯的固有性ではない。それゆえ、それは実体的固有性である。

3. 小前提の証明。いかなる附帯性もそれ自体で自存することの原理ではありえない。しかるに、実体の類における個体は個体であるかぎりそれ自体で自存するものである。というのも、種と類は自存せず、実体の類における個体だけが自存するからである。それゆえ、いかなる附帯性も個体化の原理ではなく、むしろ或る実体的固有性が個体化の原理である。理由は次の通り。形相が個体化の原理であるとは言われえない。なぜなら、形相は同じ種のうちにある諸個体が合致する原因だからである。質料も個体化の原理であるとは言われえない。なぜなら、質料は純粋に受動的であり、また形相もそうであるようにそれは種の部分でもあるからである。それゆえ、個体化の原理でありうるのは実体的固有性にほかならない。

4. それとは反対であると思われる。なぜなら、ダマスケヌスが自らの『論理学』(*Logica*) で言うことには、「ヒュポスタシスの特徴づける特徴的な固有性とは附帯性であるということを経験しなければならぬ」⁷からである。

5. わたしは解答する。質料的実体の個体化の原理が何であるかが問われるなら、複数の個体についてではなく唯一の個体について述定されるような、最も種別化された種の下での、質料的実体の共通化不可能性 (*incommunicabilitas*) あるいは特定化 (*contractio*) の原因が何であるかが問われる。それゆえ、個体化の原因が何であるかを問うことと、個体の原因が何であるかを問うことは別である。実体の個体は四原因のすべて、すなわち質料、形相、目的、作者を有する。ところで、こうした原因すべてが個体化の原因、すなわち種の下での共通化不可能性ないし制限 (*limitatio*) の原因であるわけではない。それは、人間のような種の原理であるものがすべて種別化の原理、すなわち類の下での特定化の原理であるわけではないのと同様である。というのも、動物は人間という種の原理ではあるものの、やはり動物は自らの種別化の原理、すなわち類の下での特定化の原理ではなく、むしろ理性的 [という種差] が類の下での特定化の原理だからである。このようにして個体化の原理に関する問題を理解するなら、わたしは、次元量 (*quantitas dimensiva*) がペトルスやヨハネスのような質料的実体の個体化の根本的な原理 (*radicale principium individuationis*) であると言う。そしてこれは必然的な論拠によって次のように証明される。種の下で個体化の原理であるのは、一方の個体はその種においてありうる他方の個体からそれによって区別されるところのものである。というのも、個体は自らの種のうちにある任意の個体から区別されているということにもとづいて、種の共通性がその個体から除かれるからである。というのも、種の共通性は種のうちにあるものに属する何らかの一性であるのだから、種があらゆる個体について述定されるのは任意の個体との同一性を有するものとしてであって、あらゆる個体のうちの或る個体から区別されるものとしてではないからである。したがって、個体は自らの種のうちにある任意の個体から区別されているのだから、それが述定されるのはあらゆる個体のうちの或る個体についてではなくて自分自身についてのみであり、かくして数において一つの共

⁷ PG 94, 596, 4.

通化不可能なものとなる。そして全般的に真であることには、或る共通項の下で特定化の原理であるのは、共通項の下に含まれる一方のものが同じ共通項の下に含まれる他方のものからそれによって区別されるところのものである。それは、一方の種が同じ類の下にある他方の種からそれによって区別されるところの種差が、その種を類の下で特定化する原理である通りである。例えば、理性的〔という種差〕が動物〔という類〕の下で〔人間という種を〕特定化するのには、人間を構成し非理性的動物（bruta）から区別することによってだからである。ところで、一方の個体が同じ種のうちにある他方の個体からそれによってそれ自体で第一に区別されるところのものは次元量であり、実体の類に属するものでは全くなく、また量の類以外の類に属するものでも全くない。これの証明は次の通り。同じ種のうちにある個体を区別するものは、同じ〔種的〕本性の部分として同じ理拠のうちにある事物でなければならない。実際、もしそれが相異なる本性のうちにある事物だったとするなら、それは種に即して区別をもたらしただろう。そしてその場合、同じ種のうちに諸個体があるのではなかつただろう。というのも、人間と非理性的動物がそれによって区別されるところの理性的〔という種差〕と非理性的〔という種差〕は、同じ本性のうちにあるのではないがゆえに、種に即して区別をもたすからである。ところで今や、他の何ものでもなく量が同じ理拠のうちにある諸部分をそれ自体で有する。理由は次の通り。『形而上学』第5巻では量が、それはそれらの各々が一つの本性であるところの内在するものども〔すなわち諸部分〕へと可分的であるということによって定義される⁸。というのも、線の任意の部分は線であり、面の任意の部分は面であり、物体の任意の部分は物体であり、量はこうした部分へとそれ自体で分割されるからである。ところで、実体が同じ理拠のうちにある諸部分へと分割されるのは附带的のみにある⁹。例えば、石の任意の部分は石であるが、これはそれ自体で分割される量のゆえだからである。なぜなら、量が除外されると、実体は不可分なまま残るからである。だから『自然学』第3巻で注解者が言うことには、もし無限だと言われる本性が、尺度の類にも属さず数の類にも属さないで、それ自体で実体であるとするなら、

⁸ アリストテレス『形而上学』第5巻第13章1020a7-8.

⁹ Cf. ドゥンス・スコトゥス『命題集講義録』第2巻第3区分第1部第4問題第67段落「第一には、『形而上学』第5巻での哲学者〔アリストテレス〕による。彼が言うことには「どれくらいの量か」は内にあるものども〔つまり諸々の部分〕へと分割されるものであり、そのものどものうちの個々のものは一つの或るものでありこの或るものであるよう本性づけられている」。これから受け取られるのは、同じ理拠に属する諸部分へと分割されることが量には第一に適合するということである。そこで次のように議論される。或るものに第一に適合するものが任意のものに適合するのは、その或るもの理拠によってである。——それゆえ、同じ理拠に属する諸部分へと分割されることが量には第一に適合するのだから、このことが任意のものに適合するのは量の理拠によってであることになる。さて、諸個体への種の分割は同じ理拠に属する諸部分への分割である。なぜなら、この点において諸個体への種の分割は諸々の種への類の分割から区別されるからである。しかるに、或るものどもの分割がそれによってあるのと同じものによって、分割される同じものどもの区別がある。それゆえ、同じ種の諸個体は量によって区別される。——そこからの帰結として、質料的実体は量によって単数となる」（石田隆太・本間裕之＝訳、『筑波哲学』第29号にて近刊予定）。スコトゥスはトマスのような立場を批判する論者であることを注記しておく。以下でも、スコトゥスからの引用はすべて、彼が自らとは異なる立場を取りあげている記述である。

それが不可分なものであることは必然である¹⁰。というのも、事物に可分性があるのは、尺度や数があるかぎりでのことだからである。したがって、石は量によって延長しているのだから、それは同じ理拠のうちにある諸部分へと可分的であり、かくしてそれが可分的であるのは自体的にではなくて附帯的にである。ところで、量が同じ理拠のうちにある諸部分へと分割されるのはそれ自体によるのであって、実体によるのではないし、あるいは他の何かによるのでもない。これはすなわち、全体における諸部分の秩序である立ち位置 (*positio*) が量の理拠に内包されているからであり、つまりは次元量が立ち位置を有するからである。それゆえ、同じ種のうちにある相異なる量が区別されるのは位置 (*situs*) が相異なるゆえである。だから多くの白さはそれらが相異なる基体においてあるのでないかぎり把捉されえないが、多くの線は仮に基体をぬきにしてそれ自体で考察されたとしても把捉されうる。というのも、それ自体で線に適合する位置が相異すれば線の複数性には十分だからである。同様にそれ自体で面や物体に適合する位置も相異すれば面や物体の区別には十分である。またそれゆえにわれわれは聖体の秘跡において、同じ種のうちにある他の諸次元 (*dimensiones*) とは区別された、基体なき諸次元を措定してもいる。したがって、量においては位置が相異なるゆえに同じ種のうちに諸部分があるのだから、そこには自分自身にもとづいて個体化があるのが必然である。というのは、一つの種のうちにあるものが多数化されるのは個体の数に即してにほかならないのであって、量だけが同じ種のうちにあるこうした諸部分をそれ自体で有するのだから、量だけが量的な事物において個体化の原理でありうるからである。

6. したがって、質料的実体は量によって根本的に個体化されると言われるべきである。そしてそれがどのようなかを見よ。量は質料に随伴するのであるから、質料は第一にかつ主要には量によって延長し、その結果として部分の外に部分を有する。かくしてそれは、同じ理拠のうちにある諸部分の区別を量によって有する。というのも、一方の量の下に存在する質料は、他方の量の下に存在する質料と同じ理拠のうちにあるからである。したがって質料は、こうした諸部分の区別を量によって有するのだから、量によって個体化を有する。ところで、それ自体では共通なものである質料的形相は、特定質料 (*materia determinata*) に受容されることで特定化される。かくしてそれは、同じ種のうちにある他のあらゆる形相からその質料によって個体化され区別される。かくして残されるのは、[質料と形相からなる] 複合実体はすべて量によって根本的に個体化されるということしかない。こうしたあり方を哲学者は『形而上学』第7巻で同じ種のうちにある個体の区別に関して措定している。そこで彼が言うことには「生成するものが数に即して別のものを生成するのは相異なる質料のゆえにほかならないのであって、形相のゆえではない。なぜなら、形相は不可分だからである」¹¹。そこで彼が主張していることには、同じ種にある個体の区別が質料のゆえであるのは質料が可分的だからであり、形相のゆえでないのは形相が不可分だからである。ところで、たしかに質料は、形相もそうであるように自らの本質によっては可分的でなくて不可分であるが、量によっては可分的であり、その量は質料に随伴する一方で形相には随伴しない。だから形相

¹⁰ アヴェロエス『自然学大注解』第3巻第35注解 (『自然学』第3巻第5章 204a8 以降に対する)。

¹¹ Cf. アリストテレス『形而上学』第7巻第8章 1034a5-8.

ではなくて質料の方が可分的だと言われる。それゆえ彼の意図としては、生成するものが、それがそれに対して能動するところの質料が相異なるゆえに質料において相異なる形相を導くことにより、同じ種にある個体の区別がある。質料のこうした相異は量によるものであり¹²、これこそ注解者がそこで言っていることである。すなわち、生成するものによる生成されうるものの多数化における原因は、生成するものがそれに対して能動するところの質料の多数化である¹³。一つの種にある個体の区別が量によるということは、ボエティウスも彼の『三位一体論』[第1章]で明白に主張している。彼が言うには「数に即した差異をもたらすのは附帯性の多様性 (*varietas*) のみである。例えば、三人の人間は類や種ではなく自身の附帯性によって隔たっている。というのは、もしわれわれが精神 (*animus*) によってこの人々から一切の附帯性を分離させたとしても、場所はその全員のあいだで相異していて、その場所をわれわれは一つだと思ひ描くことはできないからである」。というのも、二つの物体が一つの場所を所有することはないはずであり、しかも場所は附帯性であるからこそ、その人々も数において複数だからである。ここではまさに、数に即した個体の多数化および区別の原因が明言されている。なぜならすなわち、その人々は一つの場所においてあることはありえず、これは次元量のゆえであり、しかも次元量は、諸部分の位置が自らの理拠に属するがゆえに、相異なる場所を場所と相異なる量でそれ自体で満たすからである。それゆえ次元量は、同じ種のうちにある部分の区別をそれ自体で有するのであるからして、一つの種における何らかの多数化も有し、種の下での個体化も有する。そのようにして質料的事物においては量のみがそれ自体で個体化される。理由は次の通り。しかじかの量は、実体によるものではなく、自らとは別の或るものによるのでもない。むしろしかじかの人間は、それ自体ではなくて自らの量によってしかじかのものである。同様に、この白さは自分自身ではなくてそれが内在する量によってこれである。それは、この白さが延長しているのはそれ自体ではなくて、それが同じ理拠のうちにある延長した部分を量的な面においてそれによって有するところの量によってだというようにしてである。というのも、面が量的であるほどに白さも量的であるのだから、量によって白さは同じ理拠のうちにある部分を有し、かくして個体化を有するからである。

7. たしかにこの立場は多くの人々には歓迎されず、むしろ彼らが言うことには、質料的実体は自分自身で個体化されるのであり何らの附帯性によっても個体化されない。なぜなら、附帯性が個体化されるのはそれが内在する実体そのものによってにほかならないのであり、そもそも実体そのものの方が、彼らが言うように、質的なものや量的な

¹² Cf. ドウンス・スコトゥス『命題集講義録』第2巻第3区分第1部第4問題第69段落「哲学者〔アリストテレス〕の『形而上学』第7巻によれば、生成するものは質料のゆえに別のものを生成する。なぜなら、生成されるものの質料は生成するものとは別のものだからである。しかるに、質料が別のものでありうるのは、それが量をもつものでありしかも別の量によってそうである場合のみである。その理由は次の通りである。量をもつものであることが第一に要求されるのは、本性的な能動者が「量をもつもの」に対してのみ能動するからである。また別の量によって量をもつものであることが要求されるのは、そうでなければ質料が別のものではなかっただろうからである。それゆえ、生成するものと生成されるものの第一義的な区別は量の側から受け取られる」（石田・本間訳）。

¹³ アヴェロエス『形而上学大注解』第7巻第28注解（『形而上学』第7巻第8章 1033b20 以降に対する）。

ものがそうであるよりも本性的により先に、個体として (*individualiter*) 存在しているからである。そしてこのことを彼らは次のように証明する。事物は生成されることに対するのと同様にして存在と関わる。ところで、生成は量や他の附帯性よりも先に実体に向かって終極する。なぜなら、自体的な生成は実体に関わるからである。ところで、実体が生成されると、それは直ちにこの存在者であり、この或るもの (*hoc aliquid*) であり、個体である。だからソクラテスが生成されると、それは直ちに自分自身で個体である。それは、ソクラテスが存在者でもあり、自らの実体によってペトルスとそれ自体で実体として (*substantialiter*) 区別されるのと同様である。またもしソクラテスが或る附帯性によってペトルスと区別されるとするなら、それはより後のことであるはずである。というのも、彼らが言うように、実体の方が附帯性よりも先であるのと同様にして、実体的な差異の方が附帯的な差異よりも先だからである。それゆえ、個体化の原理は何であるかが問われるなら、存在と個体化と区別の原理は同じだと彼らは言う。それゆえ質料の実体は、質料、形相、目的、作出者というそうした原因によって [自らが] 存在し生成される四原因を有するのと同様にして、同じ諸原因によって区別され個体化される。すなわち、質料によっては可能態的に (*potentialiter*)、形相によっては現実態的に (*actualiter*)、作出者によっては作出的に (*effective*)、目的にとっては目的的に (*finaliter*) であり、これらのうちのどれかではなくすべてがともにあることでそれらが十分な個体化の原理である。ところで、量が個体化の原理ではないということを彼らは特別に他の諸論拠によって次のように示している。もし量が個体化の原理だったとするなら、量は別のものによってではなくそれ自体によって個体化されただろう。というのも、もし別のものによるなら、その別のものが個体化の原理だっただろうからである。しかしながら、量はそれ自体によっては個体化されない。なぜなら、そうだとすると、例えばペトルスやヨハネスに対してそうであるように、量には共通理解が抵触することになってしまうからである。理由は次の通り。或るものが或るものにそれ自体で適合する場合、それとは反対のものはその或るものには何らの仕方によっても適合することはできず、むしろその或るものに抵触する。ところで、量は知性の抽象によれば多くのものに共通である。それゆえ、量には共通性が抵触しないのだから、量はそれ自体では個的なものではない。

8. さらに、数学者は個体からは抽象するが、量からは抽象しない。それゆえ、個体化が量にそれ自体で適合するのではない。

9. この立場は、明瞭なところを大いに有するのではあるが、真理はなく十分な探究もない。理由は次の通り。まず彼らは問題を理解していない。というのも、あたかも彼らは、実体の類における個体の原理が何であるかという問題が問題だったかのように語っているが、わたしが言ったように、これが問題なのではなくて、個体化の原因が何であるかを問うことと個体の原因が何であるかを問うことは別だからである。たしかに、質料と形相、目的と作出者は質料的個体の原因であり、複合実体は自らの類に即してあるもののうちの任意のものである。そして四原因のうちのどれも十分な原因ではないのであって、これら四つは個体化、すなわち種の下での共通化不可能ないし特定化の原因ではないし、四つのうちのどれかがそれ自体で語られてもそうではない。これの証明は次の通り。証明されたように、四つのうちのどれによっても一方の個体が他方の個体から最も種別化された種の下で区別されない。なぜなら、個体が最も種別化された種の

下でそれによって区別されるところのものは、同じ本性の部分として同じ理拠のうちにある事物でなければならないが、個体の原因はどれも同じ理拠のうちにある諸部分をそれ自体では有さないのであり、質料も形相も作出者も目的も、また諸事物の本性 (*rerum natura*) においてあるようないずれのものも、既述のように量をただ除けば、そうであるからである。したがって、四原因は個体そのものの原因ではあるものの、個体化の原因ではありえない。さらに付け加えられている諸論拠も詭弁である。

10. あなたは、生成はそれ自体では実体に向かって終極する、と言うだろう。それは真である。しかしながら、生成が終極する前に、そこでは質料において個体化をもたらす量があり、その質料から生成が生じる。なぜなら、アヴェロエスが言うように、質料では未限定の諸次元 (*dimensiones interminatae*) が形相に先行するからである¹⁴。そしてこれは形相のより後なる理拠に関して、すなわち自然の形相 (*forma naturalis*) があるかぎりのこととして理解されるべきである。というのも、諸次元は物体の実体に随伴するのであるから、生命のある物体あるいは動物ないし獅子が理解される前であっても、物体は存在するからである。そして量がこのように質料において先行したのでなかったとするなら、生成は物体の下に含まれる単数のしかじかの物体に向かって終極しなかっただろうし、生命のある物体の下に含まれるしかじかの生命のある物体にも、単数のしかじかの動物にも、単数のしかじかの獅子にも終極しなかっただろう。というのも、量は任意の類および任意の種のうちにある個体へと特定化するのであり、すなわちより普遍的な類のうちにある個体へとより先に特定化し、次いでより普遍的でないものうちにある個体へと特定化し、最後に最も種別化された種のうちにある個体へと特定化するからである。なぜなら、質料はそのようにして、まず自然の秩序に即して、より普遍的な形相を受容し、次いでより普遍的でない形相を受容し、そして最も種別化された形相にいたるのであり、量も同じ秩序に即して形相そのものを個体化し区別するからである。

11. だがあなたは、ヨハネスは或る附帯性よりも先に自らの実体によってペトルスと区別される、と言うだろう。わたしはそれは真でないと言う。まず、ヨハネスの実体とペトルスの実体は別々のものである。しかるに、こうした他者性 (*alietas*) の原因は量そのものである。なぜなら、質料が量によって分割されている場合にのみ、能動者は同じ種のうちにある相異なる形相を質料において導くことができただろうからである。それゆえ、実体に即してペトルスからヨハネスを区別することは量における区別によるのであり、その量が同じ理拠のうちにある諸部分をそれ自体で有している。しかるに、量の区別そのものはより先なる区別に還元されない。それは、石において明らかのように、実体の諸部分の延長は量の延長によるのであって量の延長よりも後である通りである。したがって、同じ種にある個体を区別する第一原因は次元量である。そこからの帰結として、次元量こそが個体化の第一原理 (*primum principium individuationis*) である。というのも、示されたように区別の原理と個体化の原理は同じだからであり、それというのも一方が他方に続くからである。それゆえ、量は個体を区別する原理であり個体化の原理ではないと言う人々は、前者を容認するものの後者を否定していることになる。

12. だがあなたはさらに、もし量がそれ自体で個体化されたとするなら、量には共通

¹⁴ Cf. アヴェロエス『自然学大注解』第4巻第15注解 (『自然学』第4巻第2章 209b5 以降に対する)。

理解が抵触することになってしまった、と議論するだろう。これに対してわたしは、量がそれ自体で個体化されるというのは、種の下での個体化ないし指示 (*signatio*) ないし特定化が量の理拠に共通に入り込むかぎりでのことではない、と言う。理由は次の通り。量は共通名 (*nomen commune*) である。しかるに、しかじかの量がそれ自体で個体化されると言われるのは、それが同じ理拠のうちにある諸部分をそれ自体で有し、その諸部分が、魂の外に有する存在に即しては他の何らのものによっても種の下では特定化されず、むしろ相異なる位置に即して自分自身で区別されるからである。かくして一方の部分は他方の部分について述定されず、むしろ自身についてのみ述定されるのであるからして、その諸部分は自分自身で共通化不可能であり、あるいは個体化されている。他方で、しかじかの実体ないししかじかの質はこのようにして個体化されない。なぜなら、それは同じ理拠のうちにある諸部分への可分性をそれ自体では有さず、むしろ量によってそうした諸部分を有するからである。だからそれはそれ自体ではなくて量によって個体化される。それゆえ、しかじかのペトルスには共通性が抵触するのではあるが、ペトルスはそれ自体でしかじかのものであるわけではなくて、むしろ量によって自身に共通性が抵触するものを有する。しかるに、ペトルスのこの量には共通性が抵触し、この量は連結された或るものによってではなくそれ自体によってこれである。それゆえ、共通名によって指示される量には共通性が抵触しないのだから、量が個体化の原理ではないということは証明されえない。というのも、そうだとすると、実体も質料も形相も個体化の原理ではないということがあなたの立場に反して帰結しただろうからである。なぜなら、それらのうちのどれにも知性に即した共通性が抵触しないからである。そうではなくて量だけが、自分自身がそれ自体で諸部分を有するがゆえに、個体化の原理であり、その諸部分から知性は共通の種を抽象することができる。そしてもし実体と同じ本性のうちにあるそうした諸部分をそれ自体で有したとするなら、実体はそれ自体で個体化されただろうが、それがしかじかの部分を有するのは附帯性によって、すなわち量によってのみである。それゆえ、実体が個体化されるのは別のものによって、すなわち量によってのみである。

13. あなたは、数学者は個体から抽象するのであって量からではないのだから、個体化は量によるのではない、と言うだろう。わたしは次のように言う。数学者は全般的に量から抽象しない。なぜなら、数学は量に関するものだからである。だからその共通性における量は個体化の原理ではないが、それでも量は同じ理拠のうちにある諸部分をそれ自体で有するのであり、諸個体としてのその諸部分から生成が生じる。そして量は、こうした諸個体を付加されたものによってではなくそれ自体で有するのだから、それ自体で個体化され、他の量も自身によって個体化される。しかしながら、次のことが知られるべきである。量は質料の実体の個体化の原理ではあるが、実体の内在性に属する内在的な原理ではなくて、むしろ実体の類にとっては外在的な原理であり、この原理のゆえに実体は種の下で制限された共通化不可能なものとして能動者により産出されうる。それゆえ、それは外在的な原理であるのだから、ペトルスやヨハネスのような実体の類にある個体の名は、自らの表示においては量を含意せず、むしろ共通化不可能な実体を含意するだけであり、そうした実体が共通化不可能になりうるのは量によってのみである。だからこうした名は附帯的な存在者ではなくて自体的な存在者を表示する。

14. そのようなわけで、実体の個体化の原理があらゆる附帯性に本性的に先行するような実体的固有性であるのか否かが問われるなら、わたしはそうでないと言う。理由は次の通り。実体が同じ本性の諸部分へと可分的であるのは、自体的にではなくて附帯的にのみである。さもなければ、実体は量だっただろう。なぜなら、同じ本性の諸部分へとそれ自体で可分的であるということは量に固有だからである。なぜなら、それらのうちの各々が一つの本性である諸部分へと自体的に可分的であるということは量の定義だからである。したがって、実体は量ではないのだから、実体がしかじかの部分へと可分的であるのは量によってのみである。そこからの帰結として、実体は量によってのみ個体化される¹⁵。

15. 反対異論に対しては次のことが言われるべきである。自存の理拠には二つのこと、すなわち自体的な存在者であることと共通化不可能であることが属する。

16. 二つのうちの前者に関しては、どんな附帯性も態勢として (dispositive) でなければ自存の原理ではありえず、むしろ実体形相が自存の原理でありうる。というのも、実体形相は自体的な存在者を構成し、それは附帯形相が他のものにおける存在者を構成する通りだからである。なぜなら附帯形相は、自体的な存在という端的な存在を与えるのではないが、他のものへの内在という何らかの点での存在を与えるからである。

17. だが後者に関しては、量は自存の原理である。というのも、量は実体が可分的であることの原理であり、かくして共通化不可能性の原理であるのであって、この原理は個体化ないし単数性の原理にほかならないからである。そして見よ、わたしは実体において個体に関わる実体的固有性ないし固有な実体性があることを否定しているのではない。実際、それは [サン・ヴィクトルの] リカルドゥスによって『三位一体論』第2巻 [第12章] で明白に措定されている。すなわち彼が言うには、物体性のような類的な実体性と、人間性のような霊的な実体性と、唯一の個体に内在し複数の実体とは全くもって共通ではありえない個的な実体性、例えばもしダニエルにもとづいて言われるとするならダニエル性 (danielitas) は別のものである。ダニエル性が全くもって共通化不可能であるのは、それが他のものにはありえないというようにしてダニエルのうちにあるからである。わたしはこうした個的な実体性を否定しているのではなくて、それが個体化の第一原理であることを否定している。というのも、こうした個的な実体性を能動者が産出できるのは、量的な質料があって、それにおいてその個的な実体性が産出されるような場合のみだっただろうからである。それゆえ、量的な質料がそうした実体性の個体化の原理であり原因である。また、質料は量によって個体化されているが、量は他の何らのものによっても個体化されていない。それゆえ、個体化の第一原因は次元量である。たしかにしかじかの実体的固有性ないし個的な実体性は、次元量の相異なる部分と同じ本性のうちにあるのと同様にして、同じ本性のうちにある。しかるに、実体がそ

¹⁵ Cf. ドゥンス・スコトゥス『命題集講義録』第2巻第3区分第1部第4問題第80段落「おそらくあなたは次のように言うだろう。自らの体系全体に即して実体は、存在においてはあらゆる附帯性よりも先ではあるものの、分割においてはそうではない。それは次のようにしてである。実体は量よりも先ではあるものの、「同じ理拠に属する諸部分へ分割される」ということに即しては量の方が先である。なぜなら、このことは量によってのみ実体に当てはまるからである。それゆえ、第一に量が同じ理拠に属する諸部分へと分割されて [次に] 実体が量によって分割される」(石田・本間訳)。

うした部分へと可分的であるのはそれ自体によってではなくて量によってである。それゆえ、実体的固有性は個体化の原理だと措定されえない。なぜなら、実体は他のもの、すなわち量によって個体化されるからである。かくして、ダニエルが他のものによって個体化されるのと同様にして、ダニエル性もそうである。というのも、両者には一つの個体化が属するからである。

18. だがあなたはわたしに次のように言うだろう。個体が同じ種のうちにある別の個体から区別されるということが個体化には服している。天使は個体であるが、そこでは同じ種において区別された個体があるのではなくて、種があるだけ個体がある。同様に天体も個体であるが、そこでは同じ種のうちにある複数の個体があるのではない。それゆえ、それによって個体が同じ種において区別されるところのものはそれ自体では個体化の原理ではない。しかるに、それによって実体が魂の外に存在するところのものが個体化の原理であると思われる。それゆえ、実体は自らの産出因 (*causa productiva*) によって魂の外で存在するのだから、実体が或る附帯性を有することが理解されるよりも前に、能動因 (*causa agens*) が作動的に個体化の原理であると思われる。

19. これに対して、わたしは次のように解答する。今われわれが個体化について語っているかぎりでは、問題となっている質料的実体の個体化に、個体が同じ種の下で存在することもありうる別の個体と区別されるということは服さない。なぜなら、今われわれは質料的実体の個体化について、すなわち種の下での或る個体の何らかの特定化ないし制限があるかぎりでも語っており、個体化について共通に語っているわけではないからである。それゆえ、天使においてわれわれは個体化の原理を探求しない。理由は次の通り。種そのものがそれ自体で個体化されており、そこでは種の下に制限された或るものが個体であるのではなく、それは種よりも共通でないものとしてある。というのも、質料から分離された形相は質料に受容されるよう本性づけられていないのだから、まさにそのことによってそれは他の何らのものによっても特定化ないし制限されえないのであり、むしろ自分自身で制限され、かくして個体化されるのであるからして、それはいかなる仕方によっても多くの個体とは共通化可能でないものとして数においてただ一つであることになる。それゆえ、そこには種の共通性が全くないことから、共通化不可能性のいかなる原因も求めるべきではない。なぜなら、種そのものは第一にそれ自体で共通化不可能だからである。例えば、理性的 [という種差] がそれによって非理性的 [という種差] と区別されるところのものを求めることは愚かなことだろう。というのも、理性的 [という種差] は他の何らのものによってではなく自分自身によって第一にそれ自体で非理性的 [という種差] とは区別されるのであり、そもそも理性的であるということによって理性的 [という種差] は自らの対立物とは区別されるからである。同様にして、天使の種は現実態においても所有態 (*habitus*) においても諸個体とのいかなる共通性も有さないということが前提されるなら、その種がそれによって個体化されるところのものを求めることは愚かである。しかしながら、質料的事物において種はそれ自体では個体化されておらず、複数の個体に対して共通性を有する。それは、生成消滅しうるものにおいては現実態において、天体においては適性 (*aptitudo*) において複数の個体に対して共通性を有する。天体の場合、太陽の形相のように、それ自体では複数のものにおいてあるよう本性づけられている形相の側からは共通性があるが、質料の側からは

天体は唯一の個体において見出されるということがある。なぜなら、種の質料全体が一つの個体において集積されており、しかもそれは一つであって、そうした個体で宇宙の完全性には十分だからである。それゆえ、そこでは量そのものを個体化の原理として措定しなければならない。なぜなら、能動者がそうした個体を産出できるのは、それを付加された或るものによって種の下で特定化する場合のみであり、その或るものこそ量だからである。理由は次の通り。太陽は適性に即しては共通なものであるものの、諸事物の本性においてあるしかじかの太陽はそうでない。したがって、もし他の太陽があったとするならその太陽とはそれによって第一に区別されるところの或るもののみによって、しかじかの太陽は種の下で制限されている。そしてたしかに、その区別をもたらすものは量以外にはありえないのであって、能動者は個体化をもたらす量なしにはそうした個体を原因できないほどである。それゆえ、特定化する量によるのでなければ、神はしかじかのものであるかぎりでのこの太陽を産出することができなかつただろう。理由は次の通り。しかじかの太陽は、種の下で特定化する或るものによって種の共通性を欠いていなければならない、その種において存在するかあるいは存在すると理解されうるかとするもので同じ種のうちにある他のどんな個体からも区別されているということによるのでなければ、何も種の下で特定化をもたらすことはできない。ところで、区別をもたらすそうしたものは量であり他の何ものでもない。それゆえ、わたしは次のように言う。任意の個体における個体化の原理は、常に、種の下で現実態において存在する個体の区別がそれによってあるところのものであるわけではなく、むしろ現実態に即してであれ知性に即してであれ複数の個体の区別がそれによってあるところのものである。なぜなら、区別をもたらすそれは、そのように区別するものであるということによって、種の下で個体を特定化するからである。またわたしは、現実態に即してであれ知性に即してであれと言っている。理由は次の通り。アヴィセンナが自らの『形而上学』第5巻 [第1章] で言うように、太陽は知性に即しては普遍だが現実態に即しては普遍ではない。しかるに、しかじかの太陽が個別のものであるのは、他の太陽から自らの量によって区別されるということによってである。それは他の太陽が、そのように生じることが可能であるようにして、神によって他の質料において生じたような場合であつただろう。というのも、そのように生じたというようなことは諸々の理解に抵触しなかつただろうからである。ただし、同じ種において二天使が存在することは諸々の理解に抵触する¹⁶。

（いしだ・りゅうた 慶應義塾大学文学部 訪問研究員）

¹⁶ 本稿は、JSPS 科研費 18K12191 の助成を受けたものである。